

山里の民家は山の自然を取り込んでいる

作家／イラストレーター 遠藤ケイ

かつての雪国の暮らしを伝える家

僕は、一〇年くらい前から新潟県三条市で築約一三〇年の民家を拠点として活動するNP〇「ただただテラ小屋」の運営にあたっています。

ここでは毎月、囲炉裏を囲んで語り合う「炉辺夜話」の会や、マイ包丁をつくる鍛冶屋講座を開いているんですよ。去年は、女優の根岸季衣さんのひとり芝居も上演しました。新潟の民話をもとにした脚本を僕が書き、旧知の根岸さんをお願いしたら、民家での芝居を面白がってくれて。奥の座敷に一〇〇人くらい集まりました。



今年の一月には、東京の「子どもワークショップフオーラム」の子どもたちがやってきて、二泊三日で雪国の暮らしを体験しました。雪合戦に始まり、地元の名人を先生にカンジキを作ったり、雪で灯籠を作って庭いっぱい灯りをともしたり。子どもたちからいろいろアイデアが出て、幻想的で美しい雪景色が広がりました。子どもたちの一番人気は風呂焚きでしたね。薪を奪い合って燃やしました。夜は、僕が描いた絵を壁に映しながら、この家に棲んでいたお化けたちの話を朗読しました。住む人がいなかった間、ホウキ

やハタキに宿るお化けや、便所にいる雪隠坊主がどうしていたか。最後は掃除の時間でしたが、「トイレを汚すと雪隠坊主が出てくる」と言って、一所懸命掃除をしていました。子ども独特の感性で何かを感じとっているんですね。

こうした山里の民家は、山の自然を里に取り込む行為を基本としてきたと思います。山に行つて木を吟味し、「これは梁にしよう、これは柱に」と一本一本決めて組んでいった。土間は土、水周りは家の中を流れる川、囲炉裏竈は最初の火。それで、家の水の出が悪くなったり濁つたりすると、上流に何かあつたんじゃないかと、すぐ意識がいきます。また、木や

遠藤ケイ (えんどう・けい)

1944年、新潟県生まれ。自然の中で手づくり暮らしを実践しながら日本全国、世界各地を訪ね歩き、人々の生業や生活習俗を取材。子どもの遊び、野外生活、民俗学をテーマに絵と文による執筆活動を続けている。『こども遊び大全』(新宿書房)、『男の民俗学』(1～3巻、小学館文庫)、『暮らしの和道具』(ちくま新書)、『熊を殺すと雨が降る』(ちくま文庫)、『海の道 山の道』(筑摩書房)など、著書多数。

炭は、定期的に自然を壊さない範囲で持つてこなければならぬ。暮らしながら、常に意識が自然に向いている。それが、山里の民家の一番よいところだと思う。そうした日本の昔の暮らしのよさや知恵をここで伝えていきたいですね。

現代人は時間の脅迫観念に囚われているような気がします。夜昼の区別なく、人間だけが独占して成果を求めて行動している。これでは、もともと生物として備わっている生体時計が狂ってくるのではないのでしょうか。ここにいると、自然な感覚が戻ってきます。暗く

なれば眠り、明るくなれば起きる。そういうサイクルが自分にとって一番よいリズムだということ、暮らししているとわかってきます。

ボランティアが一部屋ずつ修復

この家のもとは大庄屋の屋敷で、一五年前に初めて見たときは、廃墟そのもの。恐ろしくくらいでした。自分が住もうと思つて借りたのですが、とても僕一人でなんとかなるようには見えなかった。それで、いっしょに家の修復にあたつてくれるボランティアを募集しました。そうしたら、東京からの若者も含め、毎回、三十数人も手伝いに来てくれたんです。ぼろぼろだった障子は外に出して洗い、地元のお祖母さんに教えてもらつて障子貼りをしました。休めつて言つても、みんなやめない。夢中になってやっています。食事は出しますが、交通費は自分持ちなんです。地元の人たちがびつくりしてました。

そうやって修復して一部屋ずつ住めるようになり、五年後にNP〇にしました。そのうち、自分や仲間たちだけで独占しておくのもつたいたいと考えるようになりました。僕は、民俗学の取材で日本各地を訪ね歩いてきましたが、自然を規範にした、かつての日本の暮らしで培われてきた民家の在り方や精神性がここに凝縮している気がしています。

いまは核になって動く五、六人がいて、何かあるとドットと集まります。そのメンバーはシャッター屋、板金屋、大工など、それぞれ本業だけでなく、溶接ができたり、屋根が葺けたり、木工ができたりする、いわば技術者集団ですね。こうした仲間が集まっているのは、「金物の町」として知られる三条市ならではかもしれません。